

2020年1月28日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 都築 由理子
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 近世江戸遺跡出土の漆製品の考古学的研究
論文題目（英文） An Archaeological Study of Lacquerware Excavated from Early Modern Period Edo Sites

公開審査会

実施年月日・時間 2019年12月11日・12:30-13:30

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士（人間科学）	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph. D. (Education)	UCLA	移民研究
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学

論文審査委員会は、都築由理子氏による博士学位論文「近世江戸遺跡出土の漆製品の考古学的研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 漆製品が19世紀に減少した理由は何かという質問に対しては、漆器が陶磁器にとって代わられた可能性が考えられるという説明があった。
- 1.2 江戸時代の漆利用の特徴とは何かという質問に対しては、高級品が登場するとともに、量産品が普及したことであるという説明があった。
- 1.3 江戸の漆製品の17世紀から18世紀への変化の背景に何があったのかという質問に対しては、都市生活の成長と拡大が考えられるという説明があった。
- 1.4 大名屋敷の漆工について加賀藩邸以外の事例はあるかという質問に対しては、本論文でも触れているが、水戸藩邸などで漆工用具が出土しているという回答があった。
- 1.5 町屋遺跡の漆製品の特徴は何かという質問に対しては、器種のバリエーションが

町によって異なる点が見られたという説明があった。

- 1.6 大名屋敷の赤一色、黒一色の漆器の下地についての質問に対しては、鋳物系および鋳物系+炭粉渋下地の占める割合が比較的高いが、全体としては炭粉渋下地が多いという回答があった。
- 1.7 赤一色、黒一色の漆器の使用はどのようなものであったのかという質問に対しては、民俗例ではハレの日の漆器の事例があり、古代の儀式的な酒宴などで朱器が用いられたという説明があった。
- 1.8 大名屋敷で雇用された武士についての質問に対しては、職人的技術をもった者が含まれていたという説明があった。
- 1.9 漆製品の全体的傾向を明らかにしてきた従来の研究と本論文の関係はどのようなものかという質問に対しては、本論文では従来論じられることがなかった個々の遺跡や遺物の特徴から漆製品を分析した点で異なっているという説明があった。
- 1.10 江戸の生活史をどのように明らかにしていくのかという質問に対しては、漆製品の多様なあり方から生活の様相を読み取ることができるという回答があった。
- 1.11 以上のように、公開審査会において行われた質疑応答では、申請者は質問に対して適切に回答していたことが認められる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 英文の論文題目の綴りの誤りが指摘された。
- 2.2 上記の指摘を受けて、英文の論文題目の綴りを訂正した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、近世江戸遺跡出土の漆製品を分析対象として、近世都市江戸の漆製品の利用の実態を明らかにしたものである。具体的には、江戸遺跡出土の漆製品の集成、墓の副葬品である漆製品、大名屋敷遺跡出土の漆製品、町屋遺跡出土の漆製品、南部箔椀・吉野椀・朽木盆、漆工用具などを分析し、都市における漆製品の多様な様相を体系的に論じることを目的としている。近世都市江戸における漆製品をめぐる問題は、都市の消費生活、生産活動、身分・階層と深く関わっているが、従来都市史との関連において体系的に論じられたことはなかった。こうしたことから、本論文の研究目的は明確であり、かつ妥当なものであると言える。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、近世江戸遺跡出土の漆製品を分析対象とし、考古学に立脚しつつ文化財科学的方法により分析を行い、その結果を江戸の社会との関係において解釈するにあたっては、美術史学・民俗学などの成果が援用されている。こうした本論文の方法論は、近世考古学をはじめとする歴史考古学においてあるべき総合的叙述の方法に基づくものであり、明確かつ妥当なものと判断される。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、次のような点が明らかにされた。
①近世江戸遺跡出土の漆製品の集成により全体的様相が把握できた。②ほぼ 18 世

紀以降の墓の副葬品である漆製品には階層性が認められた。③17世紀の大名屋敷遺跡における近世的椀揃形式の成立の様相が明らかになった。④18・19世紀の町屋遺跡における漆製品に遺跡ごとの特徴が見られた。⑤出土した南部箔椀・吉野椀・朽木盆は贈答・宴席・茶の湯などの漆器であることが裏付けられた。⑥漆工用具から大名屋敷の漆工という生産活動が明らかになった。このような近世江戸遺跡における漆製品の多様な様相は、都市の消費生活、生産活動、身分・階層を示すものであった。こうした本論文の成果は、資料に立脚した明確な論旨に貫かれており、妥当なものと判断される。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 近世江戸遺跡出土の漆製品を都市の消費生活、生産活動、身分・階層の視点から、都市史との関連において体系的に論じたこと。
 - 3.4.2 考古学に立脚しつつ文化財科学的方法により分析を行い、美術史学・民俗学などの成果を援用した学際的、総合的研究であること。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 人文学に属する考古学的方法と自然科学に属する文化財科学的方法を結びつけることによって、新しい漆製品の研究の世界を切り拓いたこと。
 - 3.5.2 近世都市江戸の漆製品をめぐる問題を学際的、総合的に論じることによって、列島において歴史的、文化的に重要な位置を占めている人と漆の関係史の一端を明らかにしたこと。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 考古学、文化財科学、美術史学、民俗学などの分野の横断的な研究であり、今後の人間科学における物質文化研究の学際的方向の一つを提示したこと。
 - 3.6.2 考古学的方法と考古学的知見を踏まえた上で、文化財科学的方法を駆使した研究であり、人間科学における物質文化研究の総合的方法の一つを示したこと。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

学術論文

- ・後藤宏樹, 都築由理子, 難波道成:2010 有楽町二丁目遺跡出土漆器の科学分析. 千代田区立四番町歴史民俗資料館資料館報, 第 18 号, 18-31 頁, 千代田区教育委員会, 千代田区立四番町歴史民俗資料館
- ・阿部常樹, 都築由理子, 難波道成, 服部哲則, 原祐一, 堀内秀樹, 湯沢丈:2015 漆パレット・漆溜容器の研究. 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要, 9, 189-234 頁, 東京大学埋蔵文化財調査室

- ・ 都築由理子:2019 江戸の町屋遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法. 文化財科学, 79, 23-41 頁, 日本文化財科学会
- ・ 都築由理子: (印刷中) 江戸の大名屋敷遺跡から出土した漆製品の材質・製作技法. 江戸遺跡研究, 第 7 号, 江戸遺跡研究会

その他

《調査報告書》

- ・ 都築由理子:2013 紀尾井町遺跡 2 次調査出土漆器資料の材質と製作技法. 大成エンジニアリング株式会社 (編) 紀尾井町遺跡Ⅱ-グランドプリンスホテル赤坂建て替え計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 120-125 頁, 株式会社西武プロパティーズ, 大成建設株式会社

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上